SIGHTS
KYOTO

「自分で宿をやりたい」学生時代からの夢を叶えるべく、4年間勤務した旅行会社を退職した。地元京都で空き家になっていた祖母の家を改装し、2016年に京町家の一棟貸しKYOMACHIYA-SUITE RIKYUを開業した。
小さいころから何度も遊びにきていた祖母の家。近隣の方たちは「あそこのお孫さんかぁ」と優しく迎えてくれ、今もなにかと気にかけてくれる存在だ。
観光地ど真ん中にもかかわらずローカルな祇園東山というこの地域は、清水寺や八坂神社などの人気観光地やミシュランの星を獲得する飲食店があまたあり、大袈裟ではなくここが世界一のデスティネーションになり得ると僕は思っている。

新型コロナウイルスが猛威をふるう前、京都では外国人観光客の増加により、市バスや特定の地域の混雑、一部の観光客のマナーの悪さ、次々とホテルができることによる街並みの変化などから住民の不満が募り、「京都に観光客はもう来なくていい」との声が聞こえてくるようになった。
僕たちにとって宿泊施設を増やしていくことは簡単だったが、オーバーツーリズムと呼ばれる状況を目の当たりにし、このままでいいのかという疑問が浮かんだ。地元の声を無視し、「次はかっこいいホテルをつくりたい」「もっと一棟貸しの宿を増やしていきたい」そんな自分本位の考えだけで事業を拡大することはできなかった。

そもそも“観光業”というものが人々を笑顔にできる仕事だと思って選んだ僕は、その観光が、誰かを傷つけ社会課題を生んでいるのかと悲しい気持ちになった。地域の人々に安心・信頼してもらうため、そして宿泊者には満足してもらうために宿一軒だけを夫婦2人で丁寧に営んできた。しかし、どれだけ KYOMACHIYA-SUITE RIKYU の運営を頑張っても社会課題の解決を進めることにはならない…どうすれば観光で悲しむ人がいなくなり、観光で人々を幸せにできるのか…この頃から旅行者と地域の人々が同じ空間に集い、両者の心と心がつながる場が必要だと感じていた。

観光に対する住民の不満を解決するための手段はなにか。いま流行りのライフスタイルホテルがいいのか、はたまた…。そのときの僕には最適な手段がわからず、京都大学の観光 MBA の門を叩いた。僕たち事業者にもつくる責任があり、そのためには学ぶ必要があると考えた。

2年間の大学院での学びを経て、持続可能な観光を実現するためには、まず地域の人々に観光への理解を深めていただくことが大事だと改めて感じた。歴史ある街だからと閉鎖的になるのではなく、「京都は素晴らしい街だ」ということを誇り、世界中の人々に自慢するぐらいの気持ちを持ってほしい！
京都人のそのマインドを引き出し、そして旅行者がそれを五感で感じられる。そんな空間をつくるべく、SIGHTS KYOTO のプロジェクトが始まった。

SIGHTS KYOTO の場所に選んだのは、祇園と鴨川の間に位置する京都らしさ満載の宮川町。築100年以上の元置き屋である京町家だ。建物に流れる空気と、細部にまでこだわりを感じる建築美に心を奪われた。
新しい観光スタイルであるワーケーションにも最適な、京都らしいコワーキングスペースと、地元の温度感ある観光情報が得られる観光案内 BAR。地域の人々と旅行者がコの字型のバーカウンターで一期一会の時を共有し、そこから生まれるのはお互いを尊敬する気持ちや感謝の気持ち。僕たちが喋らなくても勝手に地元の人が旅行客に観光案内をしている…そんな光景が見られたら。そんな光景があたりまえになったら、この街は間違いなく世界一のデスティネーションになっているだろう。

西澤 徹生